

빨리빨리(パルリパルリ)!

ソウル支社 稲垣 佐知也

「빨리빨리 (パルリパルリ) !」既にご存知の方も多いこの韓国語。「早く早く！」という意味であり、韓国人の国民性を表す言葉の一つである。利点欠点それぞれ持ち合っているが、今回は韓国滞在で改めて感じたこの国民性について書いてみたい。

赴任に伴い、様々な手続きが必要であった。住居、外国人登録、銀行口座の開設、携帯、インターネット等々。こうした手続きは非常に面倒であり、時間のかかるものであるが、韓国ではかなりの速さで行われる。例えば住居。入居する 3 日前まで居住者がいたものの、入居した時には全ての作業は終わっていた。前居住者の居住期間が長かったため、あちらこちらが古くなり、傷んでいたため、台所や靴棚の入れ替え、クローゼットの新設、壁紙の張り替え等、多くの修理、入れ替え、新設があったものの、たったの 2 日間で全てが終了していた。もちろん「完璧」ではないが、許容範囲であり、2 日間という速さの価値の方が断然上回っていた。その他、事務手続き等も迅速に行われ、ストレスフリーで赴任関連業務を終えることが出来た。

こうした動きはビジネス上にも現れる。まず、アポイントの約束。引き合いなど頂き、お打ち合わせの時間を決める際、多くのケースで「では、明日か明後日で」となる（たまに、午前中に電話を頂いた場合、「今日の午後にでも」というケースもあり）。日本でも業界によってはこうしたスピードでアポの約束を決めることもあるかも知れないが、私の場合、これまで「来週か再来週」が相場であった。

上手く企画見積書の提出となった場合、日本の場合はおおよそ打ち合わせから 1 週間程度で提出している。韓国でも 1 週間程度は頂ける場合が多いが、「できるだけ早く」「早いに越したことはない」と付け加えることは通常のこと。1 週間は猶予を頂いたとしても時には「提出スピードの差」が受注か失注の分かれ目になると言っても過言ではなく、2-3 日程度で提出することが普通になりつつある。

私は近年、リチウムイオン二次電池（以下、LIB）のリサーチを担当しているが、同市場での韓国企業の躍進は周知の通り。2011 年には数量ベースでサムスン SDI がシェア 1 位、LG 化学が同 3 位となり、LIB 市場でも日韓逆転が起きた。また、LIB 部材メーカーも躍進しており、「素材は日本強し」が揺らぎつつある。こうしたニュースが報道される度に話題となり、その背景の一つとされるのが韓国企業の「決断力の速さ」「生産効率の良さ（=生産速度の向上）」である。以下、赴任後の業務を通じて知ったこと、改めて気付かされた事を簡単に紹介したい。

LIB の生産工程。韓国 LIB 関連企業の技術者によれば、「日系企業は確かに細かく、マニュアル、規定に則ってきちんと製品を生産する。だから、高品質な製品を安定的に量産できるのだろう」

と評した。ただ一方、「(高品質な製品を作るために) あまりにも工程にこだわりすぎて柔軟性に欠ける。決まったプロセスから抜け出せないから革新性がない」とのことである。仮に、生産工程が10あったとした場合、日本では10の工程をきっちりと進めて品質の良い製品を作り出せるが、スピード感がない。韓国ではいかに10の工程を8~9に縮め、生産性を上げていくかに注力しているという。もちろん、それぞれの顧客から要求されている事柄は異なるし、目指している製品も異なるであろうが、「スピード感」が日韓の差の一つと言われている現在、サプライヤーの立場で対応できる重要な一つの事柄であろう。

本コラムのタイトルからは逸れるが、この速さを可能にしているものに「情報共有」及び「情報収集」が挙げられよう。日本のLIB業界の場合、セルメーカーと部材メーカーの繋がりはそれほど緊密でないケースが多いようであり、特に部材メーカーはセルメーカーから自社製品に関する具体的で詳細な評価がなされないと聞く。セルメーカーにとっては「部材の組み合わせ」がノウハウであるために過度な情報開示はなされないのが当然であろう。

韓国の場合、セルメーカーと部材メーカーの研究者が共同で同じ課題に取り組んでいるケースが多いようだ。部材メーカーから見れば電池特性の向上に向け、様々な要求はされるものの、共同で取り組むことで技術情報に関するやり取り（データのフィードバックなど）が行われ、課題に対する認識を共有でき、課題解決できる可能性も高まり、かつ、情報を共有しているが故にそのスピードも早い。

「速さ」が前面に出ているため、その質に関しては常に疑問視されていることが多い。ただ、実際には韓国メーカーの人々は情報収集に相当注力しており、非常に細かい点まで熟知していることが多い。特に日本が先行している分野については尚更である。決断に必要かつ十分な情報量を持っているがため、スピード感を持って物事を進められるようだ。

韓国企業の強さを上記だけで語られるものでは当然ない。韓国企業にはない日本企業の強さがあるのも然り。目指している方向が異なるため、上記だけで一概に日韓ビジネスの良し悪しを判断できるものでもない。

一方で韓国に赴任し、かつ、現地企業の様々な方との交流、および実際の生活を通じて改めて「この点が日韓で異なるな」と感じたことも、また事実である。

「**빨리빨리**（パルリパルリ）」はもちろん、弊社ソウル市社内にもあるわけで、現地社員からの「**빨리빨리**（パルリパルリ）」に急かされているのは言うまでもない。

※メモ LIB 製造は「速さ」だけで優劣がつくものではない。顧客ニーズにあった製品を安定的に、ばらつきなく、大量に提供することが重要である（どの業界でも同じであろう）。それこそ「カイゼン」は日本のお家芸であるが、最近では韓国企業により「徹底さ」を感じる。

※メモ 2 LIB はまだ発展途上。二次電池というくくりで見れば、次世代二次電池の研究開発も盛んであり、日系企業が先行している。次世代二次電池で再度逆転もありうることも付け加えたい。

執筆者略歴：稻垣佐知也

2000 年、㈱矢野経済研究所入社。レーザーや LED、光通信用部品、レンズといったオプトロニクス分野、コンデンサ、PCB、水晶デバイスなど電子部品など、エレクトロニクス関連の部品市場に関して一貫して調査研究を実施。近年はリチウムイオン電池を中心にエネルギー関連の調査をメインに担当。